

# ドイツ語標準変種の言語政策的考察： 発音規範成立の沿革と展望

高橋 秀彰

## 1. 序

ドイツ語の発音・正書法の統一が広範囲に実行力を伴って行われたのは19世紀末であった。プロイセンを中心として誕生したドイツ帝国で次々と刊行された辞典類が、他のドイツ語圏諸国にも波及していくことになったのである。その後、ドイツとオーストリアがそれぞれ現在の共和国に発展するまで、その頃に策定された言語規範は、様々な言語的、政治的要因が交錯する中で、今日の形へと発展してきた。発音規範については、1898年のTheodor Siebsらによる規範化以来、科学技術の進歩に伴って多くの洗練された実証研究が今日に至るまで積み重ねられ、その集大成としてDuden第6巻『発音辞典』（2000）（*Aussprachewörterbuch*）が出版されている。だが、北ドイツの発音変種を中心に始められた規範化は、今日でもドイツ語圏南部では違和感をもって受け止められており、本質的に多様なドイツ語をどのように規定するかという問題はさらに検討しなければならない。

本稿では、規範化の歴史を批判的に考察し、拡大しつつあるEUとの関係も視野に入れながらドイツ語圏の言語政策の展望を考察したい。なお、音声学に関わる具体的な事例の検討は他の論文（Takahashi 1996、2003など）に譲り、本稿では言語政策的視点から、今日のドイツ語規範を論じる上で重要と思われる問題を中心に論じることにする。

## 2. 19世紀末からのドイツ語規範化

ドイツ語が標準化される過程で、初期新高ドイツ語の時代には東部中央ドイツ語（Ostmitteldeutsch）がドイツ語圏全域に通用しうる模範的な言語変種と見なされていた。Justus Georg SchottelやJohann Christoph Gottschedのような当時のドイツを代表する文法学者は、マイセンで用

いられているドイツ語を模範的変種と考えて規範化の対象とした。その後、発音に関しては北ドイツが「正しい発音」の地であると考えられるようになった。当時の北ドイツでは低地ドイツ語が話されており、北ドイツ人は標準語として地歩を固めていた高地ドイツ語を、いわば外国語を学ぶように綴り字に基づいて発音していた。綴り字に忠実な北ドイツ人の発音は、次第に模範的な発音とみなされるようになり、標準ドイツ語は「北ドイツ式に発音された高地ドイツ語の言語形式」(vgl. Braune 1904, Trautmann 1903)として確立されるに至った。

このようにしてドイツ語標準発音規範化の基本的方向性は確立されたものの、ロンドンやパリのような政治・経済・文化の中心地が存在しないドイツでは、全域を包括する標準変種の規範化と普及が遅れ、各地域の特色を残したまま様々な言語変種が混在した状況が続いていた。さらに、当時のドイツではラテン語が学問と文化の言語として知識人の間で使われていたことも、全体を統括する共通のドイツ語変種が発生するのを遅らせた要因の一つであろう。1866年の普墺戦争でプロイセンが勝利したことで小ドイツ主義が決定的となり、政治・経済・軍事的に圧倒的な強さを誇るプロイセンを中心とするドイツ帝国が成立することになった。このことがドイツ語規範成文化の大きな転機となった。1871年にドイツ帝国が成立してからは、ビスマルクを中心に全国の度量衡、税制、法律などの統一に向けての動きが急速に始まったが、言語的統一がその中でも重要な課題であったことは言を俟たない。それまでは統一的な正書法は存在せず、出版社ごとに正書法が異なる場合が少なくなかった。ここでは、まず Eggers (1980, S. 605) に基づいて正書法成立の背景を略述したい。Jakob Grimm は語源に忠実な正書法を主張したが、Rudolf von Raumer (1815-1876) は発音に忠実な正書法を主張した。1876年にはプロイセン文部省により、ドイツ語統一正書法作成のための会議がベルリンで招集された。これが第1回正書法会議である。ここで採択された正書法は反発を呼び、バイエルンは von Raumer の原則に従って独自の正書法を1879年に発表し、オーストリアもこれを採用した。von Raumer の没後は Wilhelm Wilmanns と Konrad Duden によってその方針が継承された。プロイセン文部省はバイエルンの正書法に近づける方向で Wilmanns に委託した。Duden が Wilmanns と協力して正書法の統

一を試み、1880年に正書法辞典<sup>1</sup>が発行された。表紙には「プロイセンとバイエルンの規則による」と書かれている。1901年にはドイツ、オーストリア、スイスなどドイツ語圏の代表者による正書法会議が招集され、それに基づき正書法辞典が編纂された。そこでは<th> (Thür → Tür, Rath → Rat) が排除され、<ph> (Photograph) は外来語に限定するなど、新たな規則が採用された。1902年に発効した「プロイセン規則」はドイツのみならず、オーストリアやスイスでも採用されることになった<sup>2</sup>。

発音の統一については、正書法以上に多様な形式が地域ごとに用いられていたため、何を模範とするかが大きな問題であった。発音は、地域や職業、場面など様々な要因により変動するので、何を基準にするかが大きな問題になる。統一発音の要請はまずは劇場からなされた。文学作品を上演する際に、俳優の出身地により発音が違うと芸術の品位に関わると考えられたからである。例えば、ゲーテは、悲劇的な台詞が方言で話されると、最高の文芸作品もぶち壊しになると言っている (Siebs 1969, S. 1, „Regeln für Schauspieler“ 1803)。こうした中で特定の地域の枠を越えて、あらゆる地域で理解されうる発音の使用を職業上必要としていたのが移動劇団であった (E.-M. Krech 1961, S. 137)。地域方言を越えた舞台上の発音は、文学作品を芸術的に表現するために熟成され、模範的発音の基盤と見なされた。そこで1897年に劇場関係者と言語学者が共同で発音の規範化を行うことで合意し、Eduard Sievers (Leipzig) や Wilhelm Viëtor (Marburg)、Josef Seemüller (Innsbruck)、Karl Luick (Graz) 等の協力のもと、Theodor Siebsが舞台発音規範の制定に取り組むこととなった。その成果は1898年に『ドイツ語舞台発音』<sup>3</sup>として出版されたが、ここでは全般的な発音規則が記述されただけで、見出し語を持つ発音辞典は「Siebsの個人的な研究」(Winkler 1954/55, S. 321-330)

---

1 この辞典は *Urduden* と呼ばれることがある。

2 この正書法はほぼ100年間守られて来た。

3 *Deutsche Bühnenaussprache: Ergebnisse der Beratungen zur ausgleichenden Regelung der deutschen Bühnenaussprache, die vom 14. Bis 16. April 1898 im Apollo-saal des Königlichen Schauspielhauses zu Berlin stattgefunden haben.*

として第4版で初めて登場した。舞台発音は文字通り舞台上での発音規範を定めたものであったが、統一的な発音を求めていた放送局や学校などでも採用された。1931年には帝国放送協会の委託を受けて、『舞台発音』に収録されていない固有名詞や地名、外来語など放送に必要な語を収録した『放送発音』(*Rundfunkaussprache*)が出版された。このように、劇場での発音が「舞台発音」として記述されたものが劇場外にも普及することで、ドイツ語標準発音の歴史が始まった。

### 3. ドイツ語発音規範典の問題<sup>4</sup>

#### (1) 北ドイツ中心の規範化

ドイツ語発音規範に対して、1898年のSiebs以来今日にいたるまで、様々な批判が行われてきたが、これらの批判は、(1)採用された発音形式の代表性と(2)記述された発音形式の実現可能性の2点に集約されよう。(1)はさらに(1a)領域と(1b)地域に下位区分される。領域は、当初は舞台上での発音、後にニュースのアナウンサーの発音が模範的と見なされるようになった。地域は、Siebsらのグループがベルリンの劇場を中心に音声調査を行ったことから分かるように、北ドイツを中心に規範化が進められ、オーストリアやスイスなど他のドイツ語圏の変種は、標準発音作成の際にほとんど度外視されていた。舞台発音制定の審議に参加した6名の委員の内の5名がドイツ北部の出身であったことも影響して、ドイツ南部の発音は採用されなかった(Erbe 1899)。ミュンヘン大学のHermann Paul (1899, S. 189 f.)は、発音規則はもっぱらSiebsの裁量で決定され、定着した発音形式が確認されない場合には、Siebsが自分に馴染みのある発音形式を基準として恣意的に決定したと批判している。これらドイツ語学の碩学による批判を受けて、Otto Behaghel (1929, S. 152 f.)は、(1)統一的な発音を確定するに足る十分な知識がまだ蓄積されておらず、(2)ドイツでは発音の地域差が大きいため、全体を平準化することは困難であり、(3)一般のドイツ語話者が既に習得している発音を舞台発音で置き換えることは不可能である、の3つの理由を挙げてSiebsらによる発音規範を批判している。さらに北ドイツに偏

---

4 本節はTakahashi (2003) の第2節を翻訳し、加筆修正したものである。

ったこの発音規範は中部ドイツや南部ドイツの話者にとっては、習得が困難であることも指摘された (Behaghel 1955, S. 47)。

その後 Siebs 辞典は Siebs の没後も版を重ね、第 19 版では初めて地域の発音変異形も記述された。一方、Duden 編集部は 1962 年になって初めて第 6 巻『発音辞典』を刊行した。この辞典は Siebs の影響を受けて編纂されており、見出し語は舞台発音を規範として記述していた。Duden 第 6 巻 (発音辞典) の責任者である Max Mangold は、正書法と発音の対応について次のように記している (Mangold 1961, S. 9)。

1. 1 音声を 1 文字で表記
2. 1 音声を複数の文字で表記<sup>5</sup>
  - a) 2 文字 (例、*alle* [l] ← <ll>)
  - b) 3 文字 (例、*Belleuvue* [ll] ← <lle>)
  - c) 4 文字 (例、*Nippes* [pp] ← <ppes>)
  - d) 5 文字 (例、*Chaiselongue* [ɔŋ] ← <ongue>)
  - e) 6 文字 (例、*Mariottesches Gesetz* [tʃ] ← <ttesch>)
3. 複数の音声を 1 文字で表記 (例、*boxen* [k]+[s] ← <x>)
4. 1 音声を文字なしで表記 (例、*loyal* [oa] ← <o>)
5. 音声と文字が対応しない (例、*Steeplechase* [ə] ← <le>)

このうち 3、4、5 の例はごく少数の語に限られており、原則として 1 と 2 のように文字と発音が対応すると考えられている。Mangold (1961) を拡大して網羅的に記述したものが Duden 発音辞典 (2000, S. 69 ff.) 中の「ドイツ語発音学」(Deutsche Aussprachelehre) である。このルールにより、ほとんどのドイツ語語彙が文字を手がかりに発音できるようになっている。このように 19 世紀末に採用された「北ドイツ式に発音された高地ドイツ語の言語形式」は原則として今でも有効だと言えよう。つまり、「書くように話せ」(Sprich wie du schreibst!) という方針が定着し、一部の例外を除いて、標準発音は正書法に依拠して規定されているのである。ただし、正書法が実際の発音に対応していることがその前

---

5 発音表記は [ ], 綴り字は < > で示す。

提になる。

正書法改革<sup>6</sup>の一つとして、綴り字を発音に対応させるような変更があった。これは発音規範の策定とは逆に、「話すように書け」(Schreib wie du sprichst!)の原則である。この原則が適用されるには、ドイツ語圏全般で承認された標準発音が存在することが前提となる。だが、複数の標準変種を擁するドイツ語には、複数の発音形式が標準形として存在するので、数は少ないが新正書法と齟齬を来たす発音形式が発生する可能性がある。その場合は正書法上の変異を容認し、例えば*Geschoss*はオーストリアでは<o>が長母音で発音されるので、*Geschoß*も容認されている。しかし、オーストリア変種のあらゆる音声特徴を正書法でも再現するのは困難だろう。そもそもオーストリア標準変種の発音<sup>7</sup>はDudenの「ドイツ語発音学」と異なる点が多いので、正書法改革を発音規範との連関で詳細に分析する必要があるだろう。

## (2) オーストリア

バイエルン方言圏が大部分を占めるオーストリアにとってもSiebs規範は受け入れ難いものであった。オーストリアのKarl Luick(ウィーン大学)は、Siebs規範が6年後の1904年にオーストリアの音声的特徴を考慮に入れた『ドイツ語音声学』を刊行した。副題に「ウィーンとオーストリア・アルプス諸地方の話し方を特に考慮しながら」(Mit besonderer Berücksichtigung der Sprechweise Wiens und der österreichischen Alpenländer)を付し、オーストリアの視点からSiebs規範を再考する立場を明確にしている。Luickは、ドイツ語圏の言語的多様性を考えるならば、ドイツ語圏全域で一つの規範に集約するのは不可能で、それぞれの言語地域に相応しい発音規範を確立することが肝要であると考えた。注目すべきは、LuickがそこでSprachprovinzという表現を用いているところである。これは明らかに基層方言に基づく区分であり、国家レベルの

6 1998年8月1日から実施された新正書法は、7年の移行期間を経て2005年8月1日に唯一拘束力を持つ正書法になる。

7 オーストリア標準変種の発音を網羅的に記述した辞典は存在しないので、ここでは公式場面で使用されている事実上の標準変種発音を意味する。

標準変種はまだ想定していなかったように思われる。このことは、ドイツで編纂されたSiebs規範がオーストリアにも適用されることを前提としながら、舞台発音にバイエルン方言圏の特徴を例外規則として付加する立場をとっていたことから分かる。第1次世界大戦終了後、オーストリアは「ドイツ・オーストリア共和国」(Republik Deutsch-Österreich) (de Cillia 2003, S. 22) を名乗ってドイツへの帰属を表明したが、サンジェルマン条約でドイツとオーストリアの合併が禁止されていたため認められず「オーストリア共和国」(Republik Österreich) が正式な国名になった。当時はまだ新共和国を象徴するオーストリア標準変種という発想はまだなかったであろう。一方で、近代国家にとって言語の標準化は重要な課題であり、Siebs規範はドイツという国家の枠を超えて注目を集めていた。Luickにとっては、「最高のドイツ語」(das beste Deutsch) (ibid., S. 60) を規範化し、各地域に応じた例外を明示することによって、規範と現実との齟齬を回避することが重要であった。しかし、長期的には国家を超えたドイツ語圏共通の標準発音が成立することを想定していたのではないだろうか。Luickは、講演や学校での授業などの場面で用いられる言語形式を「講演語」(Vortragssprache) と呼び、日常語(Umgangssprache) と区別して考えた。講演語と日常語は相互に影響を及ぼし合いながら形成されるものであるから、講演語が日常生活から隔絶された異質なものになるということはあるまい。異なる方言圏の話者と会話を行う場合には、互いに自分の方言圏独特の形式を回避した講演語に接近するので、交流が増すにつれて講演語が徐々に日常語に浸透して来ることをLuickは指摘している。長期的には日常語の標準化が進行するが、様々な方言圏の観客が理解し得る発音形式を模索してきた劇場では、そのような標準化がより速く進行している。また、古典期以来の文学作品を通じて文化的にも洗練されていることから、舞台発音を中心とした規範化をLuickは支持していた。例えば、母音の前の<s>は舞台発音では有声音[z]と規定されたが、オーストリアでは当分の間は日常語に合わせて無声音を容認しつつも、長期的には有声音が普及することを視野に入れて、無声音をオーストリアの規則として確立することには慎重であった (ibid., S. 64 f.)。オーストリア標準変種確立への意識高揚は国際情勢の動きに連動して推移することになる。

オーストリアは1945年の第二次世界大戦終結に伴い独立を宣言するが、戦勝国であるアメリカ、イギリス、フランス、ソ連4カ国による占領状態が続いた。1938年のオーストリアのナチス・ドイツへの合邦（Anschluss）による犠牲者意識と、ナチスと一体化して行動したことによる加害者意識が並存するオーストリアは、ドイツから距離を置くために「オーストリア・ドイツ語」（*Österreichisches Deutsch*）の確立を言語政策として打ち出すことになる。学校教育での科目「ドイツ語」（*Deutsch*）は1949年に「授業言語」（*Unterrichtssprache*）と名称が変更された（Ammon 1995, S. 126 f.）。また、ドイツで出版されているDudenに対抗して、オーストリア・ドイツ語の語彙を記述した*Österreichisches Wörterbuch*（*ÖWB*）初版が刊行されたのは1951年である。その翌年に科目名は「授業言語ドイツ語」（*Deutsche Unterrichtssprache*）（Ammon 1995, S. 127）に変更された。4カ国による占領状態の後、オーストリアが国際法上の独立国になったのは、戦後10年が経過した1955年5月15日に国家条約が調印されてからであった。同年8月19日に再び科目名が「授業言語」から「ドイツ語」に戻された（Pollak 1994, S. 23）。

### (3) スイス

Luickの翌年にはスイスの音声学者Leumannがドイツ語音声学の本を刊行し、副題に「ドイツ語圏スイスの方言的特徴を特に考慮しながら」（*Mit besonderer Berücksichtigung dialektischer Eigentümlichkeiten der deutschen Schweiz*）を付している。Leumannがオーストリア人Luickの著書を意識しながら、スイスの立場からSiebs規範を評価しようとしたことは明らかである。Leumannの立場は、積極的にスイス標準変種を確立しようというのではなく、舞台発音の習得はスイス人にとっては困難なので、ある程度の逸脱を許容していこうという消極的なものであった。序言で、スイス人はベルリンやハノーファーの人と同じドイツ語を話す必要はないが、多くの方言特徴を放棄しなければならないと書いている。また、ドイツ留学で高等教育を受けたスイス人は、スイスの荒っぽい発音を可能な限り矯正して帰ってくるが、スイスで実務に携わっているうちに洗練された発音がまた失われてしまうと指摘するなど、Leumannはスイスの発音を劣ったものとみなしている（*ibid.*, S. 4）。



第二次大戦後には意識の変化が見られ、ドイツから距離を保とうという姿勢が伺える。スイス人のBoesch (1968, S. 231) は、Siebs規範は到底受け入れられないと評価し、Siebs規範を用いることは「国家への背信行為」とまで言っている。BoeschはSiebsの発音規範に異を唱えて1957年に*Wegleitung*を出版し、スイス独自の標準発音確立を模索していた。スイス・Siebs委員会の構成員でもあったチューリッヒ・ラジオ放送局代表のJakob Jobは*Wegleitung*の序言で、スイス標準変種の規範化の必要性を説いている。Jobによると、スイス人が選択し得る可能性は、「良きスイスドイツ語」か「良き標準ドイツ語」のいずれかである。ここで言うスイスドイツ語は、Jobがスイス人の母語は方言であると明言していることから、方言を意味していると思われる。Jobにとってはスイス化した標準ドイツ語は、標準ドイツ語が混じった方言と同様に醜悪なものであったのだ。*Wegleitung*が編纂されたのは、Siebsの新版が企画されている時期であり、それを補足する「スイス人にとって良き標準ドイツ語」の手引き作成が目的であった。ところが、*Wegleitung*では標準ドイツ語は、ドイツの教養階層が用いる発音であると規定されており、ドイツのドイツ語が基準になっている。一方で、標準ドイツ語はスイス人にとって余りにも「プロイセン的で威勢がよく、スマートすぎる」(ibid., S. 13) ためスイスでは受け入れられないと指摘している。そのために、寄せ集めの変種とSiebsを行き来するのではなく、その中庸を定めることによってスイスの標準発音を確立することがこの書の目的であるはずだった。しかし、スイス人の標準ドイツ語に対するヤーンズ的な態度が記述の端々に散見し、スイスの言語風土に根ざしたスイスらしい標準ドイツ語を求める心情と、ドイツのドイツ語こそ高尚であり現実に影響力も大きいという認識との間で苦慮しているといった感が拭えない。俳優の発音からスイス人であることが聞き取られるようだと不快であるが、その他の場面でスイス人であることが発音から聞き取れなければそれも不快である (ibid., S. 14) と複雑な心情が吐露されている。

その後*Wegleitung*は版を重ねることなく、スイス変種の一部がSiebsの第19版(1969)の適正標準発音として反映されるにとどまった。このように北ドイツの発音を理想と考える視点は、今日に至るまでスイスに根強く残っている。このことは、スイス標準変種を記述した辞典が、

*Schweizer Schülerduden* と *Unser Wortschatz* しか存在せず、ほぼ全面的にドイツの *Duden* に依存していることから分かる。それならばスイス標準変種の存在を強調する理由はどこにあるのだろうか。あえて理由付けをするならば、象徴的意味を担わせるためにスイス・ドイツ語話者が積極的に作り出したものではなくて、現実にはスイスで上位変種として運用されているドイツ語に、ドイツ変種とは異なる体系性が言語学的に確認されるという客観的な事情によるものであると説明するほか無い。スイス人自身は自分たちの話す標準ドイツ語を卑下することが多く、ドイツ人とドイツ語で会話する際には劣等感を感じるスイス人もいるほどなのだから (Takahashi 1996, S. 212 ff.)。従って、スイス標準変種は国家の象徴的な意味を積極的に担うドイツ標準変種やオーストリア標準変種とは違った意味を持っている。スイスは第2次大戦の時にドイツへの反発から、ドイツのドイツ語が拒否された経緯があり、オーストリアとは事情が異なる。Bausinger (1972, S. 33) は、第2次大戦時のドイツ帝国のナチズムに対抗する政治的姿勢が「スイス・ドイツ言語運動」 („Schwyzertütschi Sproochbiwegig“) としてドイツのドイツ語を拒否する姿勢として発展し、今日でもこの精神はスイス・ドイツ語を守ろうという意識として続いていると指摘している。ここで言うスイス・ドイツ語はダイグロシア (Diglossie) の低位変種である方言を指し、上位変種であるスイス標準変種ではない。ドイツ語圏スイスが自らの標準変種を成文化することにさほど熱心ではなかったのは、方言がアイデンティティを守る礎になっているからであろう。

スイスには4つの国語があるが、どの言語を公用語とするかは各州 (Kaanton) ごとに決められている。このような公用語の属地主義は、それぞれの地域では他言語の干渉を受けることなく、連邦レベルではいずれの言語も平等であるという言語平和 (Sprachenfrieden) (Rash 1998, S. 41 など) がうまく機能している例としてよく言及されるものである。スイスのドイツ語圏ではダイグロシアにより、上位変種である標準ドイツ語はニュースのアナウンサーや大学の講義など限られた領域で使用され、その他の多くの領域では下位変種の方言が用いられている。ここで問題となるのは、スイス国内の他言語の話者にとっては、ドイツ語圏の各地域の方言を媒介言語として用いることが極めて困難であるというこ

とである。会話の際にはいずれかの母語を用いるというルールを守り、ドイツ語圏の話者を相手に会話するとしたならば、標準ドイツ語で話すのが普通である。外国語としてドイツ語を学ぶのならば、スイス国内の特定のドイツ語方言を学ぶよりも、ドイツ語圏全域で通用する標準ドイツ語を学ぶ方が利用価値が高いからである。もしスイスのドイツ語圏話者が、自分たちに身近な方言を基に規範化して標準変種を造成したとすれば、スイス内でしか使われない小言語になってしまうだろう。2言語並存を守り続けて標準ドイツ語も併用しているのは、背後に控える大きなドイツ語文化圏から隔絶される事態を避けたいからである。つまり上位変種は、書き言葉や改まった場面で用いるという機能と、スイス国内で他の言語話者との媒介機能、ドイツ語圏との文化的連帯感を保つ機能などを担っているのである。一方、スイス・ドイツ語話者が自らのアイデンティティーを見出しているのは方言である。そのために、あえて上位変種である標準ドイツ語を国家の象徴として確立する必要がないので、スイス標準変種の成文化にはさほど熱心ではなかったのだ。

#### 4. 発音規範を表す術語の変遷

ドイツ語の発音規範が劇場を中心に進められ、「舞台発音」(Bühnenaussprache) の名のもとに規範典が出版されたところにドイツ語標準発音の特殊性が見出される。その後Bühnenausspracheはマスメディアや学校にも波及し、劇場を想定して規範化されたSiebsはドイツ語の一般的な標準発音への道を歩み始めることとなった。この潮流に対応して1922年に出版された第13版では、タイトルの„Deutsche Bühnenaussprache“に副題として„Hochsprache“が併記され、Siebsの舞台外への拡大が鮮明になった。発音辞典であるSiebsが、新語であるHochspracheを用いたのは、正しい発音が標準語を代表するとの自負があったからであろう。この発音規範は「舞台のためだけではない」(Siebs 1944, S. III)と明示されている。

Hochdeutsch(高地ドイツ語)は語源的には北部のNiederdeutsch(低地ドイツ語)に対する語としてドイツ語圏南部の変種を表し、第1音節のhochはもともと地理的な意味しか持たなかった。第2次子音推移を経たHochdeutschが標準語形成に際して中心的な変種となったため、

後に標準語と同義になった。そのため hoch が何か高尚なものを示唆するものへと転じ、標準語を表す Hochsprache が造語されたものと考えられる。「高い」という意味の hoch が、「地理的な高さ」と「文体上の高さ」の両者を表すようになったのは単なる偶然であった。*Duden Grammatik* (1959, S. 23) では、Hochsprache を Siebs 第 17 版 (1958) に記述されたドイツ語の発音と定義し、ドイツの放送局や学校、郵便局だけでなく、ドイツ語圏外の放送局やドイツ語教育でも適用されるとしている。Hochsprache の使用は地域や話者の教育レベルにより異なり、ドイツ中・北部ではドイツ南部よりも Hochsprache を使用し、教育レベルが高いほど Hochsprache を使用すると説明している (ibid.)。従って、オーストリアやドイツ語圏スイスでは Hochsprache からの「大きな逸脱」が見られると指摘している (ibid.)。

マスメディアでの使用に伴い帝国放送協会の委託で 1931 年に出版された『放送発音』は、*Siebs* を補完する外来語と固有名詞の発音が収録されているに過ぎない。この文献では放送発音独自の体系が記述されたわけではなく、基本はあくまでも舞台発音だったため、「放送発音」という表現は定着しなかった。第 16 版 (1957 年) には *Siebs* のタイトルは *Deutsche Hochsprache* となり、„*Bühnenaussprache*“ は副題に付されるだけとなり、*Siebs* が一般的な標準発音を記述していることが強調されている。その間に *Duden* 編集部による最初の発音辞典 (*Ausspracheduden*) が 1962 年に出版された。そこでは新たに *Hochlautung* という表現が導入され、*gemäßigte Hochlautung* と *Bühnenhochlautung* に下位区分された。*gemäßigte Hochlautung* は *Bühnenhochlautung* に許容幅を設けた発音形式で、辞書部ではあくまでも *Bühnenhochlautung* を標準形式として採用する立場を取っている。

1964 年にはハレ大学の Hans Krech を中心とする研究者らが *Wörterbuch der deutschen Aussprache* (WDA) を出版し、そこでも主に *Hochlautung* が用いられたが、*Standardaussprache* という表現が新たに登場した。hoch を用いた複合語は、質的に「高い」イメージを持ち、それ以外の変種は質的に劣っているかのような印象を与えるということで、その後の *Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache* (GWDA) では *Hochlautung* を完全に廃して、*Standardaussprache* だけを使用することにな

った。なお、標準発音を意味する Hochlautung は Hochsprache からの造語であるが、発音規範のモデルは Niederdeutsch が話されていた北ドイツなので、語源上は Niederlautung となるべきところであり、Hochlautung で標準発音を表すのはそもそも無理がある。正書法を Hochschreibung ではなく Rechtschreibung と言うように、正音法は Rechtlautung と称すべきである。

Siebs の第 19 版 (1969 年) ではタイトルから遂に Bühnenaussprache が削除された。そこでは標準発音は reine Hochlautung と gemäßigte Hochlautung とに分類されたが、これは Duden の Bühnenhochlautung と gemäßigte Hochlautung に対応するものである。

Siebs は第 19 版が最後の版となったため、これ以降は旧東独の WDA と旧西独の Duden が発音規範を受け継ぐことになる。Duden 第 2 版 (1974) では、Hochlautung が Standardaussprache と Bühnenaussprache を内包する上位概念として用いられているが、記述対象は Bühnenaussprache ではなくて、一般的な慣用規範である Standardaussprache の方であった。これにより標準発音を表す様々な術語は Standardaussprache で統一され、Bühnenaussprache が持っていた一般的な標準発音の意味は失われてしまった。Duden 第 4 版 (2000, S. 62) では、Bühnenaussprache は 19 世紀から第 2 次大戦頃まで古典詩劇で使用され、今日では歌曲でのみ使用される発音と位置づけている。

Siebs (第 18 版まで)	Bühnenaussprache	
Duden (1962)	gemäßigte Hochlautung	Bühnenhochlautung
WDA (1964)	Hochlautung (Standardaussprache)	
Siebs (1969)	gemäßigte Hochlautung	reine Hochlautung
GWDA (1982)	Standardaussprache	
Duden (2000)	Standardaussprache	Bühnenaussprache

## 5. まとめと展望

言語変異は、社会的、地域的、通時的な要素により多様な形で生起するので、それぞれの場面に適した言語形式の規範は無数の可能性がある。その中で、いわゆる標準語は改まった場面で最も顕著な分布を示す言語形式を基準に形作られる。その際、複数の規範が並存していて、それら

の規範が衝突した時に調整する手続きが存在せず、それらの規範を覆う何らかの統一体が共通の規範を必要とする場合に規範が成文化される。その統一体は主に言語共同体や国家、州（多言語国家の場合）などで、ドイツ語については原則として国家レベルでの標準語が標準変種として象徴的な意味を持っている。ただし、方言圏と国家が一致しない場合には問題になることがある。例えばバイエルン方言圏は、ドイツとオーストリアにまたがって分布しているが、それぞれの国家に標準変種があるので、いずれの言語形式を話者が選択するかは場面と相手により決定される。

ドイツ語の標準語成文化で重要な契機となったのは1871年のドイツ帝国誕生であった。爾来、包括的な言語調査とそれに基づく辞典類の出版は、ほとんどドイツで行われてきた。当時のオーストリアは、多くの異民族から成るオーストリア＝ハンガリー二重帝国（1867-1918）内で複雑な異民族問題を抱えており、ドイツ語統一へ向けての機運は熟してなかった。その頃開始された北ドイツを中心とする正書法と正音法の規範化が、今日のドイツ語規範の基盤を成している。オーストリアは近代国家を形成した後、国家標準変種が醸成される素地ができてから、ドイツとは異なる独自の規範を求めるようになった。特に第2次大戦時のナチズムからの距離感が、国家変種確立を強く促すこととなったのだが、オーストリアもスイスも永世中立国<sup>8</sup>であるところが興味深い。ダイグロシア状況にあって、そもそも独自の国家変種の規範化にさほど熱心ではなかったスイスとは対照的に、オーストリアは独自の変種確立に向けて積極的な言語政策を展開してきた。1951年以来オーストリア・ドイツ語の象徴として刊行されてきたÖWBは、2001年には第39版に達した。この版では、初めて発音表記にIPAを採用するなど汎用性を高めるために多くの改善がなされている。総ページ数は984ページ、見出し語数は77,000語で276ページからなり、見出し語数わずか20,000語の初版（1951年）と比べると大きな進歩であることがわかる。第39版の出版によりÖWBが質量共にDuden第1巻に一気に近づいたことで、オースト

---

8 スイスは1815年のウィーン会議、オーストリアは1955年の国家条約以来永世中立国である。

リアのコーパス計画は標準変種確立に向けて明確な成果を収めたと言えよう。また、「オーストリア・ドイツ語」<sup>9</sup>を表題に掲げた研究書も3巻(1993, 1995, 1997)が出版されていて、オーストリア変種の研究論文が飛躍的に増えている。このうち第1巻ではオーストリア標準変種に関する論考が中心になっているが、第2巻と第3巻ではヨーロッパ連合(EU)加盟に伴う言語政策的問題を取り上げた論文も収録されている。

オーストリアは1995年1月のEU加盟に伴い、Protokoll Nr. 10 (1994)により食料品に関する23語をドイツ語のオーストリア変種としてEU公用語に加えさせた<sup>10</sup>。この行為はオーストリアの標準変種をEUで認知させるための外交戦略であった。だが、この時にÖWBをオーストリア・ドイツ語の公式典拠としてEUに承認させなかったことにより、行政や司法領域における語彙はドイツのドイツ語から取り入れられる傾向が加速したとMuhr (2003, S. 200)は批判している。また、de Cillia (1995, S. 127)はオーストリア変種を認めさせるためのProtokoll Nr. 10によって、逆にEUのドイツ語は上記23語を除いてドイツのドイツ語であると規定されたも同然であると指摘している。さらにドイツ語教育領域でも新たな動きがあり、1994年に「オーストリア・ドイツ語検定」(Österreichisches Sprachdiplom Deutsch, ÖSD)を開始した。ÖSDは複数中心地性(Plurizentrität)を基本路線として、ドイツ語を公用語とする重要な国家であるドイツ、オーストリア、スイスの標準変種を考査の対象にしている。オーストリア標準変種を前面に出さずに、ドイツ語の多様性を強調することによって、ドイツのドイツ語が持つ影響力を相対化しようとする言語政策の一環と言えよう。既にドイツのGoethe-Institutによる検定試験がドイツ語普及政策を担って世界に展開している中でÖSDを開始した政策は、ドイツのDudenに対抗してÖWBを出版した政策と対比できる。ドイツが先行して実施している言語(普及)政策に対して、オーストリアが独自の路線を展開し、ドイツのドイツ語を相

---

9 *Materialien und Handbücher zum österreichischen Deutsch und zu Deutsch als Fremdsprache.*

10 例えば、「Erdäpfel」(ドイツでは「Kartoffeln」)、「Karfiol」(ドイツでは「Blumenkohl」)、「Marillen」(ドイツでは「Aprikosen」)など。

対化しようとする動きである。

だが、25カ国からなる超国家国際機関であるEUには20の公用語があり、ドイツ語の地位をEU内で安定させるにはドイツ語圏諸国の協力体制も必要になる。特に2004年5月のEU東方拡大によりドイツ語の役割が重要になる状況を考えるなら、コーパス計画に関わる議論ばかりでなく、ステータス計画をドイツ語圏諸国が協調して構想しなければならない。EUでは加盟国平等の原則の下、全加盟国の公用語<sup>11</sup>をEU公用語と規定しているが、翻訳・通訳の業務が膨大であり十分な対応はできていない。そのため、実際の業務では全公用語が平等に使用されることはなく、限られた言語が「作業言語」(Arbeitssprache)として使用されている。どの言語を作業言語として使用するかは各機関に委ねられているが、多くの場合に英語とフランス語が用いられ、EU内で母語話者数が最大のドイツ語は後塵を拝している。オーストリアがEUに加盟するまでは、ドイツに対して標準変種の独自性を強調することで、独立国としての意識を内外に示してきた。グローバル化の波で英語の勢力が増しつつあるEUの枠組みで見ると、ドイツ語の多様性よりも統一性が競争力を高める上では有利になってくる。EU内でのドイツ語教育領域などで、ÖWBがどのような役割を果たすかは興味深い問題であるが、今後はEUにおけるドイツ語のステータス計画に関わる研究がより重要になってくるのは明らかである。ドイツ語圏における多様性とEUにおける統一性の折り合いをどのようにつけるかが、今後の言語政策の大きな課題になるだろう。

---

11 その国家に複数の公用語がある場合は、その中から1言語をEU公用語として要求できる。例えば、ルクセンブルクの国家公用語はルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語の3言語であるが、ドイツ語とフランス語がEU公用語なので、ルクセンブルク語をEU公用語として求めなかった。



文献目録

- Ammon, Ulrich (1995): *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Das Problem der nationalen Varietäten*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Bausinger, Hermann (1957): *Dialekte, Sprachbarrieren Sondersprachen*. (2. Band zur Fernsehserie Deutsch für Deutsche) Frankfurt a.M.: Fischer, 1972.
- Boesch, Bruno (1957): *Die Aussprache des Hochdeutsch in der Schweiz. Eine Wegleitung*. Zürich: Schweizer Spiegel Verlag.
- Braune, Wilhelm (1904): *Über die Einigung der deutschen Aussprache* (Akademische Rede zur Feier des Geburtsfestes des höchstseligen Grossherzogs Karl Friedrich am 22. November 1904).
- Brenner, Oskar, Karl Erbe, Friedrich Kluge, Hermann Paul und Josef Seemüller (1899): „Gutachten und Berichte über die Schrift ‚Deutsche Bühnensprache‘ (1898) und die Stellung des A. D. Sprachvereins zu dieser und den auf Gewinnung einer einheitlichen Aussprache des Schriftdeutschen gerichteten Bestrebungen.“ *Wissenschaftliche Beihefte zur Zeitschrift des Allgemeinen Deutschen Sprachvereins*. Heft 16, S. 177-212.
- de Cillia, Rudolf (1995): „Erdäpfelsalat bleibt Erdäpfelsalat.“ Hrsg. Rudolf Muhr, Richard Schrodtt und Peter Wiesinger. *Österreichisches Deutsch*. Wien: Hölder-Pichler-Tempsky, S. 121-131.
- de Cillia, Rudolf (2003): „Braucht Österreich eine Sprachenpolitik?“ Hrsg. B. Busch und R. de Cillia. *Sprachenpolitik in Österreich*. Frankfurt a.M.: Peterlang.
- Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache* (1959): Mannheim: Bibliographisches Institut.
- Duden. Aussprachewörterbuch* (2000): bearb. von Max Mangold. Mannheim: Dudenverlag (1. Aufl. 1962; 2. Aufl. 1974. 3. Aufl. 1990).
- Eggers, Hans (1980): „Deutsche Standardsprache des 17./18. Jahrhunderts.“ H. P. Althaus et al. *Lexikon der Germanistischen Linguistik*. Bd.3. Tübingen: Niemeyer, S. 598-609.
- Krech, Eva-Maria (1961): „Zur Entstehung und Kodifizierung der deutschen Hochlautung.“ *Sprachpflege* 7, S. 136-141.
- Leumann, Julius (1905): *Die Aussprache des Deutschen: Mit besonderer Berücksichtigung dialektischer Eigentümlichkeiten der deutschen Schweiz*. Frauenfeld.

- Luick, Karl (1932): *Deutsche Lautlehre mit besonderer Berücksichtigung der Sprechweise Wiens und der österreichischen Alpenländer*. Leipzig/Wien: Franz Deuticke, [1904] [1923].
- Mangold, Max (1961): *Laut und Schrift im Deutschen*. (Duden-Beiträge zu Fragen der Rechtschreibung, der Grammatik und des Stils, Heft 3) Mannheim: Bibliographisches Institut, 1961.
- Muhr, Rudolf (2003): „Erdäpfelsalat bleibt Erdäpfelsalat?“ Hrsg. B. Busch und R. de Cillia. *Sprachenpolitik in Österreich*. Frankfurt a.M.: Peter Lang, S. 196-225.
- „Österreichisches Beiblatt zu Siebs ‚Deutsche Hochsprache – Bühnenaussprache‘.“ (1960): Hrsg. H. Boor und P. Dieks. 18. Aufl. Berlin: Walter de Gruyter. Abgedr. Hrsg. Gustav Korlén und Bertil Malmberg. *Tysk Fonetik*. Lund: Gleerups, S. 156-164.
- Pollak, Wolfgang (1994): *Österreich und Europa*. Wien: S-Laboor.
- Protokoll Nr. 10 (1994): Über die Verwendung spezifisch österreichischer Ausdrücke der deutschen Sprache im Rahmen der europäischen Union.
- Siebs, Theodor (1969): *Deutsche Aussprache: Reine und gemäßigte Hochlautung mit Aussprachewörterbuch*. 19. umgearb. Aufl. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Takahashi, Hideaki (1996): *Die richtige Aussprache des Deutschen in Deutschland, Österreich und der Schweiz – nach Maßgabe der kodifizierten Normen*. Frankfurt a.M.: Peter Lang.
- Takahashi, Hideaki (2002): „Entwicklung der orthoepischen Varietäten der deutschen Sprache.“ *Die Deutsche Literatur* 108 (Japanische Gesellschaft für Germanistik), S. 69-81.
- Trautmann, Moritz (1903): *Kleine Lautlehre des Deutschen, Französischen und Englischen*. Bonn: Carl Georgi's Universitäts-Buchdruckerei.
- Wiesinger, Peter. In: *Varietäten des Deutschen* (IDS), S. 9-45.
- Winkler, Christian (1954/55): „Die Aussprache des Deutschen: Zur Neuausgabe des ‚Siebs‘.“ *Wirkendes Wort* 5, S. 321-330.

# Sprachpolitische Überlegungen über Standardvarietäten des Deutschen: Entstehungsgeschichte der Aussprachenormen und ihre Perspektive

Hideaki TAKAHASHI

Die erste einflussreiche Normierung der deutschen Sprache wurde anlässlich der Gründung des deutschen Kaiserreichs im Jahr 1871 in die Wege geleitet. Die Meilensteine der orthographischen und orthoepischen Kodifizierung sind *Vollständiges Orthographisches Wörterbuch der deutschen Sprache* von Konrad Duden (1880) und *Deutsche Bühnenaussprache* von Theodor Siebs (1898). Nach dem Ableben der beiden Sprachkodifizierer wurde die Sprachkodifizierung von Nachwuchskräften übernommen und ihre Sprachkodizes haben mehrere Auflagen erlebt. Die Namen der Urheber, *Duden* und *Siebs*, sind heute Pars pro Toto für Rechtschreibwörterbuch bzw. Aussprachewörterbuch des Deutschen.

Es ist allerdings noch nicht befriedigend geklärt, wie die Sprachkodifizierung der Verschiedenartigkeit des Deutschen, vor allem nationalen Varianten der Aussprache, gerecht werden kann. Als mustergültige Aussprache wurde die „hochdeutsche Form in niederdeutscher Aussprache“ (Braune 1904) betrachtet, weil Niederdeutsche, deren Muttersprache „Niederdeutsch“ vom Hochdeutsch völlig verschieden ist, die hochdeutsche Schriftsprache gleichsam als eine Fremdsprache gelernt und schriftnah deutlich ausgesprochen haben. Für Menschen im mittel-/hochdeutschen Gebiet war diese Grundregel nicht akzeptabel war. Hermann Paul z.B., ein namhafter Sprachwissenschaftler in München, hielt die Regeln der Bühnenaussprache für problematisch, da bei der Kodifizierung im Zweifelsfall die Willkür von Siebs eine große Rolle

spielte. Die Bühnenaussprache hat sich nach vielen Umarbeitungen bis zur gegenwärtigen „Standardaussprache“ entwickelt, die im gesamten deutschsprachigen Gebiet gültig sein soll.

Es ist sicherlich unbestritten, dass die Standardaussprache, die heute vor allem im Ausspracheduden (6. Bd.) beschrieben ist, weiträumige Anerkennung findet. Im deutschsprachigen Süden bleiben aber die Unterschiede zwischen tatsächlichen und kodifizierten Ausspracheformen enorm. Dieser Stand ist insbesondere für Österreicher und eventuell auch Deutschschweizer nicht akzeptabel. Das Gefühl der Österreicher nach dem Zweiten Weltkrieg, dass sie sich von Deutschland abgrenzen wollen, führt auch zur Gründung eigener Sprachvarietät, die sich seit dem Jahr 1951 im *Österreichischen Wörterbuches* als nationales Symbol verkörpert. In der Deutschschweiz, wo Diglossie herrscht, findet man seine Identität eher in seinen Dialekten. Deutschschweizer sind deswegen um die Etablierung einer Standardvarietät nicht sehr beflissen.

Beim Beitritt zur Europäischen Union 1995 ist es Österreichern gelungen, 23 Nomen, die Lebensmittel bezeichnen, in der EU als amtlich gültig anerkennen zu lassen. Obwohl damals schon Deutsch eine EU-Amtsprache war, gab sich Österreich mit dem bundesdeutschen Deutsch nicht zufrieden. In der EU, wo das Prinzip der Gleichberechtigung aller Mitgliedsländer beibehalten wird, gibt es nach der Osterweiterung 2004 insgesamt 20 Amtssprachen. In der Tat werden aber zumeist wenige Arbeitssprachen verwendet, unter anderem Englisch und Französisch. Im Rahmen der EU hat daher die Statusplanung des Deutschen Gewicht, wobei seine extreme Korpusplanung, die sich mit der Vielfalt des Deutschen beschäftigt, nicht positiv wirken kann. Im Hinblick auf die Situation, dass in einer Rangliste der Muttersprachlerzahl in der EU Deutsch an erster Stelle rangiert und außerdem sich deutschsprachige Staaten wirtschaftlich am stärksten darstellen, liegt es nahe, auch die Stellung des Deutschen stärken zu wollen. Die Zusammenarbeit deutschsprachiger Nationen bezüglich der

Sprachplanung tut Not, damit sich die Statusplanung mit der Korpusplanung vertragen kann.